

平和の道こそ 日本の進む道

平成 20 年三箇牧戦没者慰霊祭によせて 平成 20 年 9 月 21 日 吉川孝一

私にとって、戦争の記憶は、昭和 13 年 6 月 20 日である。この日は、父が召集を受けて、大阪の連隊へ入隊する日であった。

田植えの前日の入隊なので、前日から一昼夜かけて、馬鍬押(うまぐわおし)の作業を済ましておかねば、母と私たち子供だけなので、男手のない我が家は田植えが出来ない。父は自分の出来る仕事を入隊前に全て終えておかねばと、徹夜で作業を済ませて、早朝に家に帰ってきた。

そして、母と私たち子供 4 人で、家族としてこれが父との最後の別れともなると、覚悟を秘めて、皆で一人ひとりの茶碗に、サイダーをついで飲んだことが、鮮明に浮かぶ。私は 6 歳、姉は 8 歳、弟は 2 歳、妹は 1 歳の時であった。私は 6 歳なので、これがどのような意味なのか、わからず、ただ茶碗につがれたサイダーを、飲むだけだが、姉はやはり事情が理解できたのか、何か悲しそう顔をしながら、涙を流していたのが、目に残っている。母は幼い弟と妹を膝元において、私と姉にだまって、サイダーをついでくれていたが、母の表情は、はっきり覚えていないが、キット辛い思いをしながら、子供の私たちを守り、夫のいない田植えをどうすればいいのか、恐らく途方に暮れていたことは、想像に余りある。その後、田植えはどうしたのやら、私の記憶にはない。

このように、戦争は平和な家族の暮らしを、ブチ壊し、どのような悲しい人生を、押し付けてきたことか、はかりしれない。

幸いにも、我が家の父は無事帰って来てくれたので、苦しい生活ではあったが、家族一緒に暮らせることになった。

最後に、“戦争は、誰が何と言おうが絶対反対だ” という、森田ゆりさん*1 の言葉を記します。

現在、イラクでは何の罪も犯していないのに、子供や家族が、傷つき、死なねばならないのか。

これらの状況を見れば、心が痛む。殺されるのはまだましかも知れない。

障害者として、その後の一生を送らねばならない子供の痛ましい姿を見ると、どのような理由があっても、正当化はできない。戦争は悪だ。

*1 (エンパワメント・センターを主宰し、多様性、人権問題、虐待防止などをテーマに日本全国で研修活動)

昭和 19 年には毎日、空襲のサイレンとなり、食糧生産も肥料も不足のため、農家の我が家も、食べ物不足がちであったが、昭和 20 年 8 月、ようやく戦争が終った。これでやっと、電気を暗くしないですみ、敵機の空襲もなくなり、死ぬ事がなくなったと、子供心ながらホッとしたことを、おぼえている。

ただ、悲しい事は、母の弟であった叔父が、フィリピンで戦死した事を、無事に帰還された戦友であった方から、その時の様子を、祖母に伝えて下さった。

たまたま私は、祖母の家に行っていた時だったので、その戦友の方の、話を祖母と 2 人で聞かしていただいたが、叔父の最後の状況の話になった時、祖母は泣き崩れてしまった。私も祖母のこの時の悲しみ、辛さはよくわかって、ともに泣き崩れてしまった。母として、我が子を愛しない母はいない。大事な大事な、我が子を亡くして、どれだけ悲しいか、国のためとはいえ、誰がこの悲しみを、癒せようか。

無謀な戦いをした者は、全国でこのような、悲しい思いをしている母、父、子、妻や家族に何と詫びるのか。何百万人ともいえる人々が、このような悲しみに、沈んだ事が、戦後 63 年を経ているが、いまだに祖母の悲しみに、思いをいたす時、涙が止まらない。

今、このような辛い思い、悲しい思いを、再び、何人にもさせないことこそが、この大きな教訓を未来に向かって大切にして行く道筋こそ、多大な犠牲を払った今を生きる人間の責務としなければならない。

もし、自分の愛する子や孫が、この様になったらどれだけ悲しいか。家族がその様になったら何とする。誰もそのような事は、望むまい。神から授かったこの体を、人のために尽くして一生を終える事は、人としての務めである。それをこわすことは、神の名において許されない。

63 年前の日本が受けた、悲しい事が現在、イラクで起きている。